

広がりと深まりを生む環境との対話

～園生活に埋め込まれている創作意欲～

学校法人岡崎学園 荒尾第一幼稚園 熊本県

「やりたい」を追求する日々で育まれる創作意欲と「科学する心」

「ロボットが出てくる映画をつくりたい」という目標にひたむきに取り組むなかで、子どもたちのアイデアや生活体験が交差し、周りの大人たちも巻き込まれていった日々が克明に紐解かれています。ロボットの動きや姿勢について試行錯誤したり、丹念に映画の筋書きやイメージを検討したりする子どもたちの様子からは、科学の対象は必ずしも自然物等に限らないこと、真剣に遊ぶことや暮らすことのなかに「科学する心」の萌芽がみられることに気が付かされます。ロボット映画作りは数か月にもおよび、その創作意欲は年度を跨いで落ち着くどころか一層高まっています。物事にじっくりと向き合う時間を保証し、長期的な視点で議論やコミュニティを育む先生方の援助が、子どもたちの生活に「自分たちの思いは実現できる」という確信をもたらしています。

ここが
Point!

持続する保育活動の展開を「広がりと深まり」、過去に経験してきたことが使われる「経験の編み込み」、そして「場に埋め込まれた記憶」を環境構成であると捉えた。これらを「本園の考える科学する心」として再考し、子どもたちが自分の思いを実現しようとしたり、友達と協力して課題を解決しようとしたりしてよくしていくことに着目しながら、保育の手立てをより深く探ることにした。

ロボットの出てくる映画作り

4 歳児 / 10月～1月

やっぱり映画みたいにしたい(10月13日～15日)

9月下旬からいろんな人をお客さんとして招き、キャラクターの出てくるショーごっこを始めた。しかしだんだんお客さんは来なくなってきた。そしてショーの作り直しが始まった。その後、「わんぱくだんのロボットランド」絵本でショーをすることになった。しかしショーの練習を始めるとセリフがわからない、その場で演じるのは難しいと感じて「やっぱり映画みたいにしたい」と提案する子が出てきた。そこから、みんなが演じることを映像にして映画作りを始める計画が始まった。

ロビン1号の製作(10月20日～)

映画を作るにあたって絵本に出てくるロボット、ロビン1号の製作を始める。絵本で作り方を参考にしたり、園に置いてある様々な素材を自分たちで持ってきて、びったりな材料を探したりする。大きな一つのものを数人で作る初めての経験だったので「そうじゃない!!」「違うのに」と話している姿もある。一つずつ丁寧に友達がいっていることを知る機会をすることで、「こんな感じでいい?」「こうしたい」と相手の思いも聞きながら製作を進めていく姿が出てきた。出来上がったロビン1号とごっこ遊びをたくさんすることで、より一層愛着が湧いてくる。目の懐中電灯は「電池がなくなったら目がつかなくなっちゃう」と話し、こまめに消したりする姿も見られた。

手伝ってあげる(10月30日)

ロビンの足の長さが少し違い、真っ直ぐ立つことができなくなっていた。そこで、長さを揃えるためにダンボールを重ねていき、高さを合わせることにした。最初はこの作業を1人でしていたが、近くにいた友達に「ちょっとロビン1号斜めにして」とお願いし、傾けてもらう。2人が作業しているところを見て「手伝ってあげる」ともう1人加わる。この微調整があり、支えがなくてもロビン1号は立つことができるようになった。





線を塗り直す

ロビンの線「この色じゃん!!」(10月31日)

ロビン1号についている模様の線の色。見る人によって赤やオレンジや黄色に見えた。そこで、最初に貼ってあったオレンジ色の画用紙の上から赤を塗ってみることにした。「この色じゃん!!」と気づき、みんなに聞いてみる。「この色」「これでいい」とみんなも納得して、この方法で塗ることにする。

お掃除ロボットの製作 タイヤの問題 (11月6日)

ロビン1号を作り終えると、今度は「お掃除するロボットを作りたい」と子どもたち。「めっちゃ大きいダンボールが欲しい」と作り始めた。口に穴を開けた後ろに段ボールを丸めてタイヤを作ることにするが、すぐにぺちゃんこになってしまい困る。「できないね」と言いながら自分たちがタイヤの中に入ってみる。保育者に「今浮いてる?」と聞く。「浮いてるよ」と答えると、「僕たちが中に入ったらできるのに～」と話す。それを聞いてGが「そうだ!中にクルクルのいっぱい入ってるからそれ入れたらいい!!」と気づく。ダンボールで小さな丸をたくさん作り、タイヤの中に入れていく。それを見ていたRが「G君のやつ、絵本の絵と同じだから多分うまくいくと思う」と言い、手伝ってくれることになった。

歯が動くように (11月8日)

上の歯を動かす時に「紐で引っ張る」という案が出てきた。紐で引っ張ることは、1学期に製作した100階建ての家のエレベーターの作り方が影響か。下の歯を作る時には「くるくる棒をつけて下に刺して引っ張る」と決める。しかしチラシを丸めた細い棒ではすぐに曲がって

うまくいかない。ガムテープで強化したり2重に重ねたりするがうまくいかなかった。その時、ロビン1号のアンテナを作るために用意された太い木の棒を見つける。「これ使ったらいい」とひらめき棒を木にすると、曲がることなくうまく動かすことができた。

ロビン1号を歩かせるには(11月17日)

子どもたちはロボットの「ロビン1号」を歩かせるようにしたいという思いを抱くようになった。材料は、園庭の半屋外空間の工房で土粘土にめり込ませて遊んでいた金属の「戸車」がいいとひらめき、翌日工房に探しに行くことになった。その日の放課後、保育者は工房の戸車のそばに、キャスター（自在車）なども、選択できるよう材料置き場に配置した。翌日、目当ての戸車を探しにいった子どもは数個置いてあるキャスターに引き寄せられるように近づき、ロボットに使用する分を取り保育室に持って帰った。最初、キャスターそのものを転がして遊んでいたが、やがてロボットの足に取り付けかかった。初めの方法はガムテープの粘着面を表にして輪を作り、ロボットの足とキャスターを接着させるがすぐに無理があると気付く。ロボットの足の裏に穴を開けて取り付けることを試みた。しかし、ロボットが立つようにバランスを取るため足の裏には牛乳パックやダンボールなど7枚、8枚重なっていて穴を開けるのは難しかった。そこで考えたのが足の4つの角にキャスターをつけてバランスを取る方法だった。片足に4個ずつ、両足で計8個つけると、なんとか立つことができた。

キャスターを取り付ける



上の歯は紐で





絵本みたら
真ん中に
ついてるんだよ

絵本をみせる

スイッチはどこについている？

説明の方法 (11月21日)

お掃除ロボットのスイッチがついている場所を決めている時、最初は絵本を見て左腕にピッタリ貼ってあった。Jは「つけている場所が間違えてる」と保育者に伝えに来了。「どこにつけたいと思っているの?」と聞くと、「真ん中」と答えたので、それを他の友達にも伝えることにした。

J「ねえ、ちょっとここついてる場所違うんだよ」

N「合ってるよ」

J「でも見て、絵本見たら真ん中についてるんだよ」

N「これは体が丸いからそう見えるだけだよ」

この会話をした後、Jはもう一度保育者に「どうやったらNわかる?」と聞きにきた。どこを見て隙間を開けた方がいいと思ったのか10分ほど考えて、もう一度Nに絵本を見せながら伝えにいった。

J「ねえ見て、ここの手のところからこんくらい隙間ある」

G「確かにそうじゃん、真ん中に見えてきた」

N「体が丸いからでしょ?」

J「体が丸いんだけど、手のところからこんくらい隙間ある」

N「じゃあもうしていいよ」

そして、Jは自分が思っていた真ん中の位置に付け替えることにした。

役割分担の姿 (1月11日～)

作る物を話し合い紙に書き出し、子どもたちに製作の状況を見える化した。子どもたちは、ロボットの腕が落ちてしまうことの修繕やアンテナの制作など「これまだ誰もしてないならする!」「じゃあ、こっちする」と役割を分担して作る姿が出てきた。友達が大変そうな時に手伝うという形で参加する姿もよく見られた。昨日やっていたことの続きを知っている子が新たにきた子に教えるという姿も見られるようになった。

ロボットの完成 映画の撮影準備 (1月18日)

ロビン1号、お掃除ロボットが完成すると映画の撮影をしたいという気持ちが出てくる。そこで、どこで、どうやって撮影するのかを子どもたちが考えるための作戦

ノートを作る。園の環境をよく見て「最初のところは工房が似合ってる」「ロボット工場はもも組がいい」「街はブロックに布かけて作る」と自分たちの思いを書き込んでいく。場所が決まると子どもたちの中でもだんだんイメージがついてきて「先生は見ておだけでいい!!」「自分たちでできるこれ!!」と自信を持っている姿がある。

撮影 映画ができた!! (1月29日)

撮影する日、朝登園すると「今日は撮影の日だね」と楽しみにしている。撮影が始まると、一つの場面を撮るのに時間がかかることもあり「映画作るのがって大変だ!!」と話している。「次はこのシーンを撮ろう」と保育者が言うと自分たちで動き出したり、なりきって演じている姿がある。撮影したものを保育者が編集し、子どもたちに見せる。すると「すごー!!」「めっちゃ上手にできてた」と喜んでいる姿があった。子どもたちに感想を聞くと「撮影めっちゃ大変だったけどできて嬉しかった」と満足げな姿。完成した映画を保育参観で保護者にも見せることを決め、映画を楽しくみてもらうためにポップコーンを作ったり、チケットを作ったりする。

ロボットどうなる?

リサイクルという考え方 (3月7日～11日)

映画の撮影も終えて、新たにロビン2号を作り始めていた。「もうすぐさくら組(年長組)になれるね」と喜んでいた子どもたち。帰りの集まりの時間、Aが保育者に「みんながさくら組になったらロビン1号たちはどうなるの?」と尋ねてきた。「どうしたい?」と聞くと迷わず「持って帰りたい」と言う。しかし大きすぎるので、このロボットたちは写真に撮って1人1枚持って帰ることにしようと保育者が提案した。それは子どもたちもすぐに納得し、その後のことを考え始めた。全部年長のクラスへそのまま持っていきたい、お遊戯室のステージの裏に隠しておきたいなどそれぞれ思うことはあったようだが、最終的にはロビン2号はまだ完成していないので、それだけは年長組に連れていく、ロビン1号とお掃除ロボットは壊すという選択をした。お別れの日を決めてその日までみんなでカウントダウンをして当日を迎えると、「やっぱり壊すのやめたいな」という気持ちも出てきた。「みんなで壊すって決めたじゃん」と言う子もいた。そ

作戦ノートを作る





撮影 演劇用スモーク

こで園長が「リサイクルって知ってる？」と子どもたちに聞く。知っている子も知らない子もいたが、ピンとは来ていなかった様子。ロビン1号やお掃除ロボットで作った部品は全部壊して分解した後、また別のものに生まれ変わることができるという話を聞くと、「リサイクルっていいね」「リサイクルしたらロビンたちも悲しくないかも」と話し、全員が壊すことを受け入れた。その後の解体の仕方とても丁寧で、誰も乱暴なことはせず部品の分類をするところまでみんなで行った。

お掃除ロボットを分解



考察

今まで様々なものを作ってきた本園の子どもたちだが、自分たちが作ったもののその後を心配をしたのはこの時が初めてだった。それだけロビン1号とお掃除ロボットは子どもたちの中に強く残っていたのだろう。お別れすると決めてからの子どもたちは、今まで以上にロボットたちとたくさん遊んだ。しかしいざ解体するとなると寂しさや残したい気持ちも出てくるのが当然だ。そんな中『リサイクル』を知ると、スッと受け入れ大切に解体する姿に変わったのも驚きだった。「別の何かに生まれ変わることができる」というのが子どもたちの中では衝撃的で新鮮だったのだろうか。また保育室や工房に様々な素材や部品が置かれていて、それらでいつも何かを製作しているのでリサイクルという概念を受け入れやすい土壌が環境の中にあっただのかもしれない。今まで子どもたちの中ではあまり意識したことのなかったであろうリサイクルが、しっかりと身になっていく場面を見れた気がした。

「科学する心」を感じた **小さなつばき**



3歳児

大根がない

畑に大根の葉っぱが育ってきたのを見て、3歳児が不思議そうにつぶやきました。1ヶ月前に「大根の種」と聞いて植えたのに、大根が見えません。葉っぱしかないのが不思議なようです。

実践の背景や全体像、
園の先生による事例分析や考察は
論文をお読みください。

